

11月・歴文研修会

紅葉の幻住庵・永源寺
聖武帝の軌跡を訪ねて

11月24日。歴文のチャーターバスはいつも満席。いつも好天、いつもご機嫌。今日は少し曇り空ながら定時に西大寺駅を出発。京滋バイパスを抜け近江路に入り石山へ。紅葉も旬を迎え道中の秋風情を楽しむ。

幻住庵。奥の細道を終えた松尾芭蕉がこの草庵に入り四か月滞在、自炊しながら俳諧の奥義を纏めた名著「幻住庵記」を完成させる。風雅を愛した草庵の雰意気を堪能する。

名神高速道を八日市まで駆ける。湖東三山の紅葉の名所・永源寺を訪ねる。長い石段を登ると古色に満ちた伽藍に圧倒される。残念ながらお目当ての紅葉は期待外れ、季節変動に恨みを残し下山。

昼飯の永源寺そばは旨かったですか。いやいや、なら山そばには及ばないヨ。そんな声がヒソヒソ。

短日を見越してそうそうとリーターン。帰路は聖武帝が平城京を抜けだした謎の行動を、遺跡を辿りロマンに浸る。**紫香楽の宮跡**、大仏造立が始まった場所とされる叢林の中に礎石が残る程度で、宮跡はこの地の他所にあるらしい。岩本先生のご高説を伺い大仏造立の顛末を興味深く拝聴する。

奈良に向かって和東町に入る。見事な円墳が近づく、**安積親王墓**である。周囲は茶畑に囲まれ、夕日に輝く景観は私の経験でも一番の美しい姿であった。

最後は幻の都となった**恭仁京跡**。一条の夕日が射し思わず石柱に集まり記念撮影。芭蕉の侘び、古刹の寂び、聖武帝の謎、安積親王の悲劇、など歴史の深遠なロマンに酔う一日であった。



(川井秀夫)

12月・歴文研修会

座学と押熊・中山・秋篠の
地元歴史探訪

12月15日。午後の降雨率70%。予報は未定なり、なんと終日雨の洗礼を受けず暖かい日差しにも恵まれて、正にミラクル。

今年の恒例行事は永井幸次氏の紹介で、地元の押熊町界隈を歴史探訪する。午前は押熊町水利組合会館にて座学。講師は岩本次郎氏・中井弘氏（吉川利文氏は体調不良で欠席）の熱弁を拝聴する。

演題は「天然痘の歴史検証」岩本氏。「南京事件の真相」中井氏。両氏の熱い語りにあっという間の2時間が過ぎる。それぞれの時代に蔓延した疫病の脅威、ウイルスの恐怖。現代にも続く自然と文明の相克に、人類滅亡の危機感すら想像してしまう。

南京大虐殺の真相は、日中の外交上の今日的課題だが、時代と共に藪の中に葬られて行くのだろうか。ただ、戦争の愚かさ、悲惨さを後世に伝えて行かねばならない。そんな思いを痛感する。

「押熊」この地に熊がいたような町名。平城京の北端に位置した事から「隈」と呼ばれ「押」は「忍」から「押」に転化したと言う。

午後は野外へ飛び出し、押熊町から中山町・秋篠町と探訪の足を進める。室町期の八幡信仰の古社を二つ、皇位継承に纏わる悲劇の忍熊・籠坂王子の双墓、常光寺の湛海作の秘仏鑑賞など、奈良・平安・室町期の歴史の痕跡に印象深い体験であったと思う。

案内役の永井幸次さん、講師の岩本・中井両氏、途上レクチャーの古川祐司氏、反省会の設営に奔走願った池田富子さん、ご参加の皆さん有難うございました。

最後にこの地を訪れた西行法師の歌を披露して今年の締めと致します。

秋しのの外山の里や時雨らん

伊駒の嵩に雲のかかれる

(川井秀夫)